猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：205部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
滝之原地区：125部
市民センター：90部
（9地区）
名張市議会：20部
名張市役所：30部

モンキードッグ

地域犬を考える

全国的に野生鳥獣による被害金額は減少傾向にあるといわれていますが、しかし精神的なものを含めると、中山間地域を中心に被害が治まっているとは感じられず、依然として中山間地域が抱える大きな問題となっています。

クマが、ショッピングセンターに入り込んだとか、市街地でのサルの大暴れなどのニュースが、昨年は例年と比べて多かったように思います。

サルを含め、あらゆる野生動物の行動や個体数は、自然生態系の中で適正にコントロールされることが自然界の原則ですが、オオカミの絶滅などで食物連鎖システムは崩れ、サルを含め野生獣の生息数は拡大傾向にあるといわれています。

名張市では、サルの大量捕獲などで一時期サル被害が減少していましたが、現在では生息数、分布域共に元に戻りつつあります。

今後、予想される人口減少や住民の高齢化、狩猟者の減少や高齢化で、獣害対策は益々困難な時代を迎えます。

名張市では、鳥獣害を防止するために隣接する宇陀市と平成18年、宇陀名張広域鳥獣害防止対策協議会を締結し、県境を跨いで被害を及ぼす、サル対策に取り組んできました。

その一環として、平成21度～28年度にかけ両市の住民から候補犬を募りモンキードッグ（以下MDと表記）の訓練育成に取り組み、延べ総数33頭の認定登録に至っていますが、しかし、いずれも飼い犬を訓練したものです。

今後は、動物保護管理センターに保護され、飼い主が現れなければ殺処分される捨て犬達を、MDの候補犬とし利用することで、無益な殺処分を減らす対策を講じることも必要なことです。

写真上＝認定式
名張・宇陀両市では、平成21年導入以来33頭のMDを育成、認定しています。

MDがいる地域ではサルの出没も減り、サルによる被害の防止につながっています。MDを導入することで「サルの捕殺」など、もともと殺したくないものを殺す側の精神的負担も軽減され、猟友会の高齢化と継承者不足といった問題からもMDの有用性は高いものがあります。しかし、現在では飼い主、犬共々高齢化が進んでいて、犬においては死亡例も数件確認されていて、MDの存続は厳しい状態です。

昔はどこにでもいた野良犬や放し飼いの犬が減ったことも、サルなど野生動物を人里に近づけた原因の一つとも考えられていて、昔から犬はサルの天敵のような立場だったのです。

MD導入当初は、人間の追い払いよりも、犬がサルを見つけて吠えたてたら、サルの逃げ方が違ったと言うほど成果があったのです。そこでMDの復活と、地域皆んなで飼う地域犬（MD）を提案・提唱いたします。

現在では、警察犬や盲導犬、介助犬、聴導犬などが活躍していますが、今後さらなる少子高齢化が予想される中、犬は今後人間が、より一層助けを借りることが必要な存在になると考えます。

従来サル対策は、主として囲みと駆除が主な手法だったように思います。今まで何度も大量捕獲を実施してきましたが、決してよい結果には繋がってなく、むしろ、悪賢く（わるがしこく）警戒心の強い個体群を創出したと指摘されています。

今後は「犬猿の仲」効果で、サルも殺さずに猿害を減らし、更に動物保護管理センターに持ち込まれた保護犬の中から適応犬を選び、訓練、利用することも重要で、これにより殺処分される犬を減らすことにも繋がり、動物保護法に照らしても重要なことになります。

1頭のMDが守れる範囲には限界があります。MDがいる地域にサルが出没しなくなっても、サルが活動エリアを移動させただけでは意味がありません。MDを地域全体に帯状に配置することが大事なこと。また、戦後の大規模な人工林化で、もともと多かった広葉樹が減り多くの動物の餌が少なくなりました。このため、野生動物は人里に現れるようになったのです。鳥獣害を減らすには、鳥獣が山で暮らせる環境を整え、山の餌だけを食べて生活できるように環境を整えてやることが大切です。

今後は、集落や農耕地から離れた奥山の広葉樹林帯に目標地域を定め、その地域に群れをMDで追い上げ、完全に定着するまで見守っていくことが重要になってきます。それには、訓練費用などクリアしなければならない諸々の問題がありますが、決して机上の理想論ではなく、実現可能な対策です。また、今後は、MDはサルだけでなく、全ての野生動物に対応できるように訓練すべきで、長野県伊那市ではすでにで「ディアー（シカ）ドッグ」が活躍していると聞きます。

少子高齢化が進展する農村では、住民パワーだけでは、効果的な獣害対策ができないケースが増加し、深刻な問題になっています。

そこで、地域が所有者となり、地域ぐるみでMD（地域犬）を飼育。

併せて、緩衝体の設置や不要果樹伐採など複合的対策を行い、獣害のない地域作りに成功した、滋賀県蒲生郡日野町奥之池（おくのいけ）地区と東近江市での取り組みを紹介します。

獣害がなくなった！ 日野町奥之池

滋賀県蒲生郡日野町奥之池（おくのいけ）は、地域ぐるみでMDを飼育する全国的にも珍しい地域。東近江市は、日本でも有数の被害地域です。

日野町、東近江市は、MDを獣害対策の一つのメニューと捉え、里山再生や不要果樹伐採など複合的な対策を駆使し、動物が近づけない「見えない柵」を作り、人と動物が共存する本来の集落作りに取り組んでいる地域です。

滋賀県蒲生郡日野町奥之池（おくのいけ）地区は、周囲を山で囲まれ、戸数23戸の小さな集落で、日野町有害鳥獣被害対策協議会では、同地区を総合的な「サル対策モデル地区」として指導している地区。また、地域ぐるみでMDを飼育し活躍している全国的にも珍しい地域。奥之池も中山間地域の例に漏れず、十数年来獣害に悩まされてきたと代表は言う。

現在実践されている地域犬の運用状況や、バッファゾーン設置や不要果樹伐採など、色々苦労が多いが、目的に向かって住民は取り組んでいる。

日野町有害鳥獣被害対策協議会では、集落の実態に応じた対策が必要という観点から、同地区を獣害支援隊によるバッファゾーン設置と合わせた総合的なサル対策モデル地区として指導している。

講演で「防護柵の設置が獣害対策の終わりではなく始まりである。」と話されていたことが、印象にのこっている。

☆MD導入

MDには雑種のメスが最適で、しかも子犬から訓練するのが最もよい方法という。奥之池地区では譲渡犬を、２０１０年11月～２０１１年４月スクールで訓練。同年４月認定され、現在に至る。訓練経費は日野町有害鳥獣被害対策協議会。飼育経費（エサ代・予防注射・避妊施術代など）は、集落負担。（年間約10万円）飼育者一人を決め、集落全員の犬として集落の諸行事への参加、散歩などを行っている。

奥之池では、MDは対策メニューの一つと考えており、複数の対策を長期的に行うことが大事という。

☆不要果樹の伐採と秋起こしの徹底

不要果樹は、集落内に28本（柿22本、栗5本、スモモ1本）あったが、所有者の協力のもと全て伐採を完了した。また、野獣を誘（まね）き寄せる源（もと）となるレンゲ栽培をやめ、稲の収穫直後の耕耘の徹底につとめている。

☆大規模緩衝帯設置

奥之池地区では、集落全体を巡る延面積4ヘクタールの緩衝帯を設置し、後々の管理対策を踏まえ地権者の了解を得ながら地域共有の公園化をめざしている。

日野町農林課に問い合わせたところ、奥之池地区では不要果樹の伐採と秋鋤の徹底、大規模緩衝帯設置など全ての対策は終了し、獣害のない昔の奥之池に戻ったといいます。

「はな」は、まだ若くて働き盛りですが、サルの出没がなくなり、近々勇退の予定とか。

奥之池
地域犬「はな」

東近江市

東近江市は、鈴鹿山系からのイノシシ・サル・シカ・ハクビシン・アライグマの出没で、日本でも有数の被害地域である。

担当者によると、東近江市では、イノシシは平野部の住宅地まで生息域を伸ばし農作物・人的被害も深刻である。

シカにおいては県内に6万7千頭、東近江市ではH23年に1，200O頭捕獲（24，000O頭以上の捕獲が必要）という。サルでは、17群が存在し1，000頭が生息。うち、11群約700頭が集落や農地に出没。特にハナレザルの対策がやっかい。そのため、獣害対策への取り組みはトップレベル。

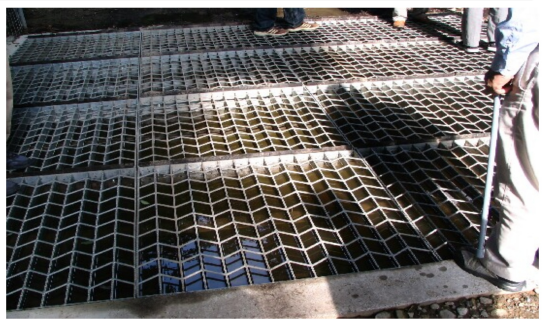
MDはあくまで追い払い活動の一形態と位置付け、まず、農地周辺や集落内の環境整備と住民らによる、追い払い活動、不用果樹の整理等の誘因除去を行いサルが出没する条件を低減させることが必要。そのうえで、サルが出没しにくい状況を維持するためにMDを導入。MDはあくまで追い払い活動の一形態。人間による追い払い活動（ロケット花火等）の実施も必須である。

周囲の伐採環境整備を行なっていない地域ではMDは認めていない。

◎緩衝地帯

「田畑の周りの山林や竹やぶがキーポイント」

田畑の周りに手入れの行き届かない竹やぶや山林があれば、棲み家や隠れ場所になるので追い払いは成功しない。田圃（たんぼ）のすぐ横の藪に逃げ込めば安全。これではどの対策も効かない。緩衝地帯としての山際の整備や、集落内の移動経路となる竹やぶは伐採する。これだけで出没は格段に少なくなる。また、出没してきても奥山の方までの追い払いが可能となる。「緩衝帯には、近くの幼稚園児や家族連れなどが訪れるようになり、常に人の気配や声により、野生動物との棲み分けが自然に成り立つ」と、地域住民。今のところ管理は地域で行っているが、「今後、緩衝地帯の維持管理が問題だ」と市関係者は言う。



◎防護柵

林道に野生動物の侵入を防ぐゲートを設置。滋賀県版テキサスゲート（仮称）＝右写真

4メートル×4メートル　深さ35センチ

このゲートにより野生動物が侵入できない。

◎両地域ともMDを一つのツールと捉え、複合的な対策を講じていたことが印象に残って残っています。

名張市　MDの現状

宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会（以下、協議会）が平成21年度から育成したMDは平成28年度には最大頭数33頭に達し、それぞれの獣害多発地域などに居住。

私たちMD仲間も「獣害地域に帯状にMDを配置できた！」と喜びました。しかしサル群の被害が絶えず、協議会はサルの大量捕獲を平成27年度に実施し、結果、名張B群は減少したが現在では10数頭。A群は分散と他群との合流などで未だに「名張市つつじが丘」など住宅地にも出没している状況です。

その間において「認定MDを活用できる飼い主」の資質問題が当時のMDの運営仲間で浮上し、MDと共に飼い主への再訓練と再認定試験を実施した結果19頭が残り、更に老齢、死亡などで減り現在は14頭。その後、MDと飼い主らの健康状態、獣害対策に対する飼い主のモチベーションについては追跡確認しておりませんが、MDや飼い主らの高齢化と死去に伴い年々活動できるMDは減少していることは事実です。

MD育成の事業終了後、MD育成訓練士事業を協議会は補助してきましたが、その後のフォローはなされておらず、私は近所のワンちゃんに引っ張り癖をなおす「付け歩き」の基本などをチョコチョコと教えてあげる程度です。

我が家のMD1期生「モミジ・団十朗」も死亡し、今やMD4期生の元・野良犬の「シロウ」1頭のみ。彼は赤目地区や安部田地域で放浪していることを、見聞きしていました。その後、成犬になってから我が家の「モミジ・団十朗・ユウ」と散歩中に仲良くなって、半年ほど家の周囲をウロウロする中でやっと保護して9年目。推定11歳～12歳。人間年齢で言えば50歳台の働き盛りだけれど、我が居住地域では滅多にサルを視ないので狩りへのテンションも上がらず中年太り？で減量を試みています。

しかし、団十朗亡き後、山に連れて行くと3～4頭の鹿群れを追い回したり、呼び戻しなど、私の指示に対する服従心は十分あり、MD能力を維持しています。

朝夕の散歩を兼ねたパトロール中、「スワレ！、フセ！、マテ！、来い！」の反復訓練を数分間は必ず行っており、島田紀子訓練士に教わった成果の手ごたえを感じています。

既認定MD14頭はもちろんのこと、愛犬家の皆さんも、つけ歩きと右記4つの反復を日々の数分だけでも繰り返すうちに自分の犬を「手の内」に入れられると思います。

名張鳥獣害問題連絡会会員
寄稿・畠山ひさ子氏

サル出没状況

A群について

捕獲情報

7月7日、上比奈知にて1頭（オス）

7月20日、上比奈知にて1頭（オス）

11月27日、滝之原にて1頭（オス）

12月2日、滝之原にて2頭（オス・メス）

以上

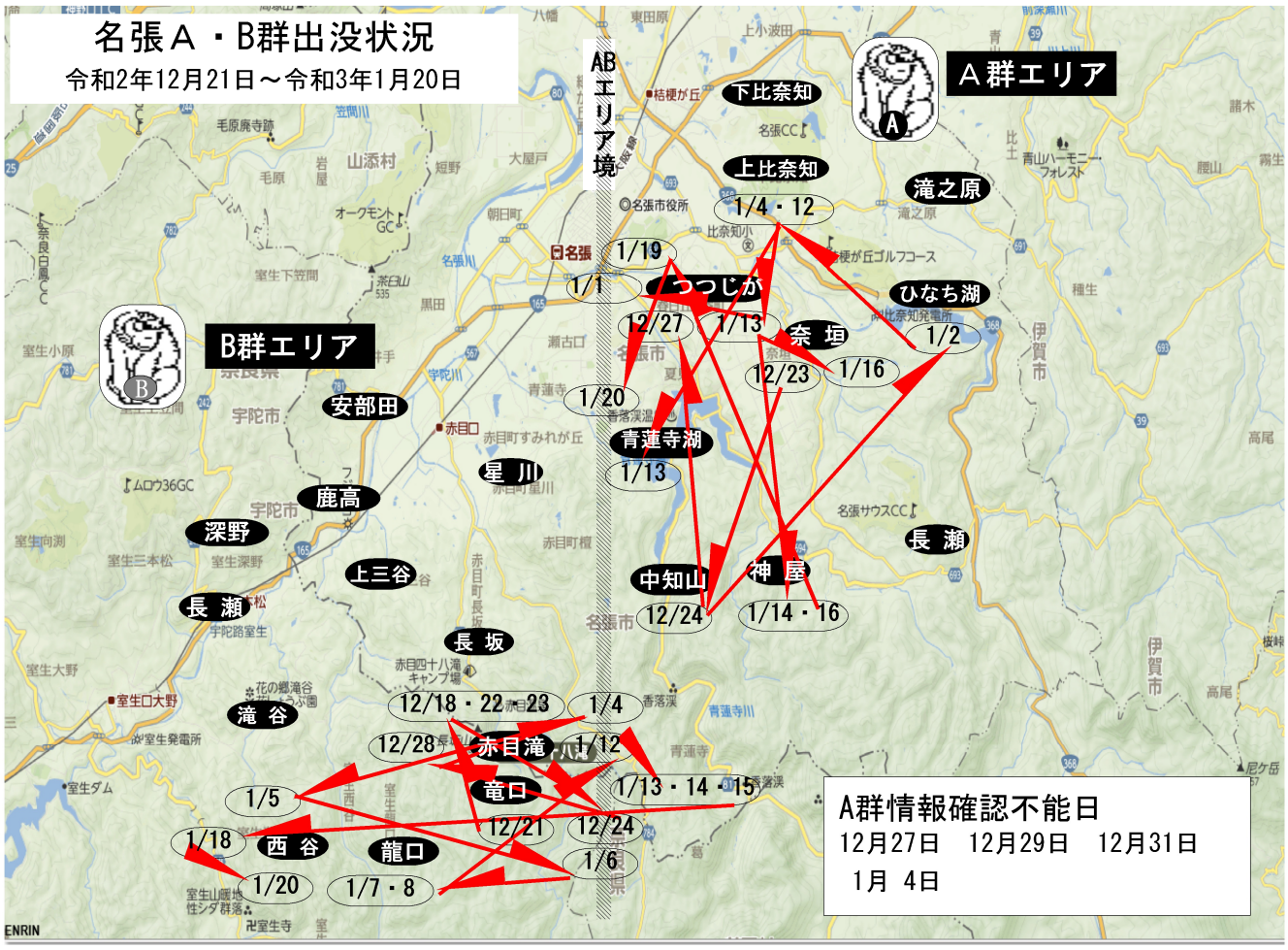
※12月7日、滝之原にて1頭（メス）捕獲し発信器装着して放獣。

先月滝之原地区、すずらん台地区に出没していたサルは、名張市農林資源室によると、古巣・青山方面に帰ったいいます。群れには、発信器装填したサルがいるので、テレメトリーによる追跡調査は続いています。

A群では、目視やテレメトリーによる確認不能の日が続いています。青山群の分裂と思われる群れと合流し、青山方面に行っていることが想像されます。

B群は、1月5日に少し遠出をし、西谷地区の「蕨（わらび）」に行ったことがありましたが、その後は伊賀竜口・赤目滝周辺に固執し遊動を繰り返しています。

群れの遊動距離が短いと言うことは、周辺に餌が豊富にあるということです。サルを誘引していると思われる餌などを「地域ぐるみ」でなくすことに心がけて下さい。



チョコット一服

「丑年」牛について

今年は丑年です。干支の「丑」という漢字は、手で物をつかむ様子を描いた象形文字から来ています。

「草木も眠る丑三つ時」など十二支は時間や方角を表すのに用いられます。「丑三つ」は午前2時から2時30分をさします。丑の方角は「子、丑、虎、卯・・・」の「子」は北、「卯」は東を指します。「丑」はその間の方位となります。ウナギを食べる「土用の丑の日」は今年は7月28日（水）です。牛と人間との付き合いは永く家畜としての牛の祖先は、ユーラシア大陸などに住んでいたオーロックです。フランスのラスコーの洞窟の壁画にオーロックを狩る様子が描かれています。1万５千年前のころだと云われています。日本で牛が飼われるようになったのは弥生時代の３世紀頃だと云われています。機械化されるまで田畑の耕作や運搬に利用していたようです。食肉や牛乳にも利用していたようです。現在では、主に食肉や牛乳、チーズ、バターと無くてはならない食材になっています。これからも牛と人間との関係は永く続くことでしょう。

文・田村　修市